鳴ノ海の物語

プラスイオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鳴ノ海の物語

【Ｎコード】
Ｎ８６３２Ｙ

【作者名】
プラスイオン

【あらすじ】
雪国シギアの農村で暮らす少女ミヤは、ある日畑で、根雪に残る小さな獣の足跡をみつけた。足跡を追って山のなかへ入っていくと、そこにはいつも祖父から立ち寄るなと言われていた＜鳴滝川＞があった。ミヤが川で遊んでいると、一人の少年があらわれた。その少年は、ミヤの亡き母のことを知っているようで……。
一方シギアの王都では、戦を終えて新しい時代「拓きの時」が始まろうとしていた。＜舟渡り＞の能力をもつ皇子センリは、妹の誕生式典で、観衆のなかに信じられない光景を目にする。

これは、それから十年が経ったシギアに伝わる<鳴ノ海>にまつわる物語――。

序章　ナリノカミ

序章　ナリノカミ

テルサの山々が眠るころ、レーネの子どもたちは蜜色のやわらかな陽ざしを受けながら、白く染めあがった村を駆けまわる。皆どこからか雪をかきあつめてきては、村の広場に山のように積みあげ、小さな手で丁寧に押し固めていく。

やがていくつかの大きな雪山ができあがると、子どもたちは何人かに分かれ、鼻や頬を赤らめながら、大人が数人入れるような穴を掘っていき、最後には見事な雪洞をつくりあげる。

息を切らしながらやってきた子どもたちに雪洞の完成を告げられた大人たちは、藁を持ちより、それをできあがったばかりの雪室の屋根にそっとかぶせていく。そして鳥の巣のように乗せられた藁のうえには、女たちが朝からこしらえたたくさんの菓子や料理が、子どもたちの鋭い視線を受けながら、酒と一緒に乗せられていく。

村人は昼にはご馳走を持ち寄り、日が暮れるまで男たちは酒を飲み、女たちはたわいのない話をする。

子どもたちもご馳走を食べたり、雪玉を投げあったりして冬の短い一日を過ごす。

やがて日が沈み、空が薄闇に包まれると、雪洞には火が灯され、雪深い村は月の下で淡い光を放ちだす。

夕餉を終えた子どもたちも再び広場に集まり、ハイの木でできた拍子木を打ちながら〈ナリノ唄〉をうたい、村中の田や畑を練り歩く。

――これは雪国シギアの、のどかな農村に古くから伝わる祭り事だ。

小正月のその日、三才になったトビもようやくミヤの許しを得て、村の子どもたちと一緒になり、雪洞づくりに汗をながしていた。
トビは去年までは、自分より背の高い子どもたちが協力し合って雪洞をつくりあげていくのを、ミヤの隣で目を光らせながら見ていた。

やんちゃな男の子たちが仕事を放りだし、雪玉をつくって投げあいをはじめると、トビの手はいつも、ミヤの手から必至に離れようとした。
ところが、雪玉を投げあっていた子どもたちが大人たちに注意されると、離れようとしていたトビの手はとたんにおとなしくなり、ミヤの手を握り返してきた。
そんなとき、ミヤは心の底から我が子を愛おしく思った。いつかはトビも、大人たちに注意されようが、そんなことも気にせずはしゃぎまわっているようになるのかと思うと、そんなすがたを待ち遠しく思う一方、ずっとこのままでいてほしいと思うのだった。

「ちゃんと、お隣のシーヤちゃんの言うことを聞くのよ。それから、危ないから川へは近づかないでね」
いまにも外へ飛びだしそうな小さな背にむかって、ミヤが言った。
するとトビは振りかえり、ミヤの不安そうな目を見てにっこり微笑むと、行ってきますと言いながら、踵をかえして外にでた。

トビが開け放った戸のむこうから、温かな光がさしこみ、ミヤを包んだ。
（ギン……）
ふいに、全身になつかしい温もりを感じ、ミヤはそっと目をとじた。瞼の裏で、一人の少年がぼんやりとすがたを現わした。透き通るようなその瞳は、つよい光をたたえている。

（あのとき、わたしがちゃんとあなたの言葉を受けいれていれば……）

ミヤは、大きく息をついた。ふっと、白い靄が広がった。

（あのとき、あの瞬間に戻れたなら……）

そう思いつづけ、もう十年が経つ。

耳をすませば、遠い彼方から笛のように高く細い音（ね）が、野山を越えて響いてくる気がした。

とても切なく、哀歌にも聞こえるその音が――。

一　ミヤとギン

一　ミヤとギン

雪解け水が野山を潤しはじめた長い冬の終わり、ミヤは畑のそばの根雪に残る、小さな獣の足跡をみつけた。まだ開きかけの、ユリの蕾の形をした細くて長い足跡だった。

「それは、ソフ（ウサギ）の足跡だな」

小さな足跡を、目を凝らしてじっと見つめていたミヤのうしろから、日に焼けてしわだらけの顔が覗かせた。

ミヤは目を輝かせて、オウキのほうを振りかえった。

「この足跡をたどったら、ソフに会える？」

オウキは顎をなでながら少し考えると、しわがれた声で言った。

「そうだな……会えるかもしれないな」

その言葉を聞いて、ミヤは手に持っていた農具を放りだした。

驚いて見ているオウキに、すぐもどると一言告げると、足跡が伸びていく山のなかへと入って行った。

足跡をたどりしばらく山のなかへ入っていったとき、ミヤは足を止めた。

（ない……）

ミヤが追っていた小さな足跡は、根雪とともに途切れてしまい、辺りを探してもどこにも見当たらなくなってしまっていた。

呆然と立ちつくし、辺りを見まわしていると、山の奥からかすかに水の流れる音が聞こえてきた。いつも、オウキに近寄るなと言われていた、鳴滝川（なるたきがわ）のあるほうからだった。

（わたし、もう十才だもの。川遊びだって平気よ）

ミヤは心のなかでそう言い訳すると、何かに導かれるかのように、鳴滝川のほうへ歩きだした。

一歩一歩ゆっくりと進んでいくと、次第にその音は大きくなり、やがてミヤの目の前に昼さがりの陽を浴びて光りながら、うねるように流れる水面がすがたを現わした。
（これが、鳴滝川）
思っていたよりも浅く緩やかに流れるその川を見て、ミヤはにっと笑みをうかべた。
そして靴を脱ぎ、袖をまくりあげると、そっと冷たい水のなかに足を入れた。透き通った水が、ミヤの日に焼けた細い足をなでて次から次へと流れていく。足を動かせば、小さな魚が底に沈む小石の陰からすっとでてきて、また見えなくなった。

「これ、きみの靴？」
時間が経つのも忘れて小石を踏みながら川をのぼっていたとき、ふいにうしろから声がしてミヤは振りかえった。草が生い茂る川岸に、濡れた白い靴を持った少年が、こっちを見て立っていた。
「あ、わたしの靴！」
ミヤは少年の持っている靴を見て、ぱっと頬を赤らめた。その濡れた靴は、たしかにミヤのものだった。
「いいよ、ゆっくりで。走ると危ないから」
いそいで駆けよるミヤに、少年は穏やかな声で言った。
靴をうけとって礼を言うと、ミヤは少年に気づかれないように小さくため息をついた。
（流されたのかな、ずぶ濡れだ……）
そんなことを考えながら、うつむいたままぼんやりしていると、少年が言った。
「川遊びは好き？　その靴が乾くまで、一緒に遊ぼうよ」
ミヤはそれを聞いて、一瞬オウキの顔が頭にうかんだが、
（ちょっとだけ、靴が乾くまでだけ）
と、また心のなかで言い訳をすると、少年にむかって笑顔でうなず

いた。

「わたしはミヤっていうの。あなたは？」

濡れた靴を持って川をのぼりながら、ミヤは横で並んで歩く少年に言った。

「いい名前だね、ぼくはギン」

慣れない褒め言葉にミヤは照れ笑いをうかべながら、ギンの瞳を見つめた。

この川の水のように透き通り、陽の光をうけて輝いている。自分よりも少し背が高く、細い手足は雪のように白い。見るからに、身体は弱そうである。

「わたし、毎日おじいちゃんの畑仕事を手伝っているから、こんなに黒くなっちゃった」

ミヤがぺろっと舌をだしてそう言うと、ギンは目尻にしわをうかべて笑った。小柄で、しわをうかべて太陽のようにやさしく笑う顔は、オウキそっくりだ。

ミヤがオウキやソフの足跡の話をしながら、しばらく川をのぼっていくと、ふとギンが静かな声でつぶやいた。

「ここをもう少しいくと、滝壺があるんだ。滝壺は危ないから、そろそろ引き返そう」

急に川上のほうを見つめながらそう言うので、ミヤは口をとがらせた。

「ギンは、おじいちゃんと同じようなことを言うのね。大丈夫よ、少しなら。わたし、もう十才だもの。ギンも行ったことあるんでしょう？　わたしも見たいわ、滝壺」

ミヤがそう言うと、ギンは今度は足を止めて、まっすぐとミヤの目を見て、

「だめだよ、危ないんだ」

と表情のない顔をして言ってきた。
ミヤはギンから目をそらし川上のほうに目をやると、遠くのほうから聞こえてくる水がどっと落ちる音に耳を澄ました。
そうやってしばらく黙って水の音を聞いてから、渋々、
「わかったわ、行かない」
と膨れた顔をして言った。きっと、自分が何を言っても、ギンの答えは変わらないだろうと思ったからだ。

機嫌を損ねるとつい早足になってしまうミヤは、何度も滑って転びそうになってしまった。そしてそのたびに、うしろを歩いていたギンに身体をささえてもらい、助けてもらった。
ミヤの顔は転びそうになるたびに恥ずかしさで赤くなり、気がついたころには、ギンと目を合わせられなくなってしまっていた。

「こんなところまで送ってくれて、ありがとう」
ギンのうしろで夕日に照らされて黄色く光っている山を見ながら、ミヤは言った。
「きみのおじいさん、ずっと心配して待っていたみたいだね」
（え？）
ギンの言葉を聞いてうしろを振りかえると、畑の隅で座っているオウキのすがたが、遠くに小さく見えた。オウキはずっと、なかなか帰って来ないミヤを待っていたようだ。
「もう、さきに帰っていていいのに。おじいちゃんたら」
ミヤがそんなことを言っていると、オウキはミヤに気づいたのか、手を高くあげて大きく振ってきた。それを見て、ミヤもあきれ顔をうかべながらも、手を振りかえした。
「ギンは、一人で大丈夫？　暗くなると危ないでしょう？　おじいちゃんに頼んで、一緒に送ってあげる」
ミヤが振りかえってそう言うと、ギンはにっこり笑って首をふった。

「大丈夫だよ。それより早く、おじいさんのところへ行ってあげてよ」
夕日に照らされて、ギンの顔も山のように黄色く輝いている。ミヤはすこし戸惑ったが、ギンがオウキのほうを気にかけていたので、少し待っていて、と言うと、いそいでオウキのほうへ駆けだした。

歩きなれた山道をくだっていくと、だんだんと小さくぼやけていたオウキの顔は、はっきりと見えてきた。疲れを隠しながらずっと顔をほころばせて、こっちを見ている。
「ごめんなさい。足跡が遠くまでつづいていたから、遅くなってしまったの」
ミヤはオウキのもとへ着くと、まず言い訳をした。それから、
「男の子と会ったの」
と言うと、来た道を振りかえった。
「そうかい、それはよかった。なかなか帰ってこないから、心配していたんだよ」
オウキが隣でそう言っているのを聞きながら、ミヤは山のほうを見つめた。
しかし、見つめた先にたしかにいるはずのギンのすがたがどこにも見えず、ミヤは目を疑った。
（……おかしいな、もう帰っちゃったのかな）
さっきまで一緒にいたあの少年は、たちまち根雪に残っていた足跡のように、ミヤの目からすがたを消してしまったのだ。
けれど、横でソフは見つかったかと聞いてくるオウキの声で、ミヤは我にかえり、首をふって笑った。
「ううん。でも、また今度、会えるといいな」

「ミヤはほんとうに、おかしな子だよ」
ミヤと炉を囲み、きつね色に焼かれて香ばしいにおいのしているカジ（イノシシ）の肉にかじりつきながら、オウキは言った。

ミヤは冗談だと言って笑っているオウキを、きっとにらみつけた。
オウキは、いつもこの言葉を口にする。だから、ミヤにはオウキが本気で自分をおかしな娘だと思っていることくらい、もうとっくに気づいていた。
けれど、そんなオウキをにらみつけている自分でも、たしかにそう思うことはしばしばあった。自分はどこか、人とは違うということに、ふとしたことで気づかされるのだ。
けれどそのたびに、きっと親ゆずりなのだと思いこみ、それ以上深くは考えないようにしていた。

ミヤは、自分の両親の顔を知らない。
物心がついたころには、すでにこの古びた家で、オウキとふたりだけで暮らしていた。だから、ミヤはオウキを自分の親のように慕っていたので、五才の誕生日のとき、はじめて真実を告げられたときは、自分でもすぐにその話を受け入れることはできなかった。

――ミヤのほんとうのおじいちゃんは、わたしじゃないんだよ
まだ幼かった私がオウキに真剣な目をして言われた言葉が、耳の奥でこだました。それは一瞬で、愛する親から突き放されたような、そんな言葉だった。
ミヤは泣きながらオウキにしがみつき、それはどうしてかと問いかけた。
するとオウキは、やはりまだ言うんじゃなかった、という顔をしながらも、ミヤを落ち着かせ、ゆっくりと丁寧に話しはじめた。

朝から空を覆っていた分厚い雲が消え、ようやく雨があがった夕暮れ、畑仕事の帰りにミヤを見つけたこと。人里離れたあぜ道で毛布に包まれ、一人置き去りにされていたその乳飲児は、なぜか泣きわめいて親を呼ぶのでもなく、にこにこと笑っていたということ。
そしてそれがどうしても、自分には不思議に思えて仕方がなかっ

たということ。
それで気にかかり、とりあえず連れ帰ったその日が、ちょうどいまから四年前だということ……。
ただ、いまは、ミヤのことをとても愛しているということ……それらすべてを、遠い目をしながら語ってくれた。

「わたしのお父さんやお母さんも、おかしな人だったのかな」
ふてくされた顔をしながら、ミヤはオウキに言った。
オウキは熱いお茶をすすり、歯にはさまった肉の筋をとろうと口をもごもごさせながら、低い声で唸った。そして首をかしげると、
「そうだなぁ……」
と、言葉を濁してしまった。
「でも、きょうはたしかにその男の子と、一緒に山のなかで遊んだのよ。嘘じゃないんだからね」

壁の隙間を通って入ってくる風に吹かれ、ときおり小さく揺れている炉の火を見つめながら、ミヤは昼間会った少年を思いだした。
風に揺れてさらりと流れる黒髪、透き通り輝く瞳に、目尻にしわをうかべてやさしく笑う顔。落ち着いた声、白く細い手足……。
まるで、ギンは川のようだった。太陽のように笑うのだけれど、ずっと冷静で、まっすぐ川上を見あげていたその背には、なぜか冷たいものも感じた。
名前しか聞いていなくて、年も家がどこかもなにもわからない少年ではあったけど、またいつかどこかで会えるような気がして、ミヤは会えるその日が楽しみになっていった。

（今度は、なにを話そう）
そんなことを考えながら、ミヤは寝床についた。
するとすぐに、すやすやと深い眠りに吸い込まれていった。

翌朝、ミヤは、雨が激しく地を打ちつける音で目をさました。
オウキがたてつけの悪い重たい戸を開け、降りしきる雨を見つめながら、田畑を心配している声が聞こえてきた。
天気のいい日はもちろん、少しの雨でも外へ出て、日が暮れるまで田畑にいるオウキは、このような天気の日はずっと薄暗い家のなかでじっとしている。
お茶をすすったり、農具を磨いたり、ときには一日中床で横になっていることもあり、見ていてとても退屈そうだ。

晴れていれば時々こののどかな農村の家々を、一軒一軒往診にやってくる医者たちも、きょうのような雨の日には訪れない。子どもも外で遊べないから、雨の音だけが延々と聞こえてくる。
きょうのレーネの人々は、静かに一日を終えそうだ。

ところが、ミヤは違った。ミヤは寝床から跳ね起き、壁に掛けてあった蓑を頭からかぶると、一目散に冷たい雨の降る外へ飛びだしていった。
ミヤは、夢を見た。双子池で、まだ子どものソフが溺れる夢だった。
（あの池は、たぶん濁り池のほうだ）
泥を跳ねながら、ミヤは夢中で村の外れのほうへと駆けていった。長い坂をくだり、滑って転んではまた立ちあがり、息を切らしながらひたすら走った。

少し雨が弱まったとき、ミヤは濁り池と七色の池が並ぶ、双子池へとたどりついた。どちらの池も水かさが増し、土色に濁っていた。
ゆっくりと濁り池のほうへ行くと、土色の池のそばに、白くて丸いなにかがうずくまっているのが目に映った。
（ソフだ……よかった、間に合った）
ミヤは足元に落ちていた太くて長い木の棒を手にとり、足音をた

てて気づかれないように、そっとソフのほうに歩み寄った。
しかしその刹那、目の前は突然真っ白になり、直後に大地を揺るがすような大きな音が、大気に轟いた。
（あ、だめ……！）
激しい音に驚いたソフは、そのまま跳ねあがり、水しぶきをあげて、濁り池のなかへと滑り落ちてしまった。
ミヤはいそいで水のなかでもがいているソフを助けようと、草を踏み倒して前へ進みでた。
しかしそのとき、濡れてやわらかくなった草はミヤの重みで深く沈み、足元は一気に崩れてしまった。
視界が揺れ、身体が浮くのを感じ、ミヤは高い悲鳴をあげた。一気に池のなかへと吸い込まれていき、口のなかには細かい草の混じった泥水が、容赦なく流れ込んできた。
（おじいちゃん、助けて）
遠のいていく意識のなかで、ミヤは必死にオウキの名を呼んだ。やがて視界は真っ暗になり、ミヤは冷たい水のなかで、意識を失ってしまった。

ミヤが意識をもどしたのは、夕焼け空の下に広がる、静かな森のなかだった。あの大雨は嘘のようにあがり、朱く染まりだした空には雲ひとつなかった。
ミヤはゆっくりと起きあがり、目をこすりながら辺りを見まわした。すると、遠くのほうから誰かが自分の名を呼んでいるのが聞こえてきた。
（おじいちゃんだ）
ミヤはすぐに立ちあがり、なつかしく聞きなれたその声のするほうへと走りだした。

森をぬけると、そこは、いつもオウキとミヤが一生懸命手入れをしている畑が遠くに見える、ギンがすがたを消したあの場所にでた。

あのときと同じように、オウキは畑にいて、ミヤに気がついて手をふっている。
ミヤはそれを見て乾いた蓑を脱ぐと、オウキにむかって大きく手をふりかえした。
（もしかしたら、ギンが助けてくれたのかもしれない）
心の底で、ミヤはふと思った。なぜかはわからないけれど、そんな気がしたのだ。
（ソフは、大丈夫だっただろうか……）

うしろを振りかえると、青く茂る山々は夕日を浴びて、また黄色に輝きだしていた。濡れた土のにおいは、たしかに雨が降った後の、あのにおいだった。
夢ではない。ミヤは、そう思った。
たしかに、濁り池へ行き、池に落ちるソフを見た。そして、そのソフを助けようとして、自分も池に落ち、そのまま意識を失ってしまった。その出来事はすべて、さっきまであった出来事なのだ。
（ありがとう）
ミヤは自分を救ってくれた、正体のわからない何かに、礼を言った。
そして踵をかえすと、背伸びをしながら、ずっとこっちを見て待っているオウキのもとへ駆けだした。

二　秘密

二　秘密

「皇子、ミカリでございます」
センリが書物を読んでいたとき、背後のふすまの向こうからなつかしい声がしてきて、センリは顔をあげた。
ミカリと聞いて、おかっぱ頭の少女を思いうかべながら、ふすまの向こうにいるその声の主に言った。
「よい」
するとふすまはゆっくりと開き、長い金色の髪をうしろで一つに束ねた少女が、軽く一礼をして部屋のなかに入ってきた。ぴんと背筋を張ったまま静かに歩み寄ってきて、センリのまえで正座した。落ち着いたその仕草は、センリの知っているミカリではなかった。
「長く見ないうちに、変わったのではないか」
ミカリが腰をおろすのを見届けると、センリは苦笑をうかべながら言った。
「貴方さまとは、もう六年お会いしていませんでしたからね」
（六年……）
センリにとって、ミカリと兄妹のように遊んでいた日々はつい昨日のことのようだった。けれど、いまのミカリを目にすると、やはりそうでもないらしい。ミカリは自分の知らない六年という月日のなかで、随分と変わってしまったようだ。
久々に見る少女の顔を見ながらそんなことを考えていると、センリが手にしていた書物に気づいて、ミカリが言ってきた。
「それは……？」
センリは書物に目を落とすと、表を見せながら言った。
「これは、シギアの風俗史だよ。一応、皇子だからね。この国のことを学んでいるんだ」

ミカリがかすかに笑った気がした。
「きょうは、なぜここに？」
センリがそう言うと、ミカリは軽く咳払いをした。そして、深く頭をさげながら、
「イナさまのご誕生を伺って、お祝いのごあいさつに参りました」
と言った。
そんなミカリを見て、センリはすこし沈黙をおくと、
「ミカリ、どうしてそのような言葉をつかうのだ？　……むかしは、そんなふうではなかったのに」
と眉間にしわをうかべながら言った。
するとミカリは驚いたのか、目を丸くしてこっちを見てきた。
「だって、もう十四ですから。いつまでもむかしのままでは……」
胸に寂しさに似たものを感じながら、センリはミカリを見つめた。
そんなセンリを見て、ミカリは、今度は声をだして笑った。
「センちゃんは、なにも変わってないのね。わかった、ふたりだけのときは、こうしてむかしのように話すわ。それでいいかしら？皇子」
ずっと仮面をかぶっていたかのようだったミカリの顔が、一瞬で、幼くて意地悪だったなつかしい少女の顔にもどり、センリは大きく息を吐いた。
「皇子をばかにするな」
肩を落とし、緊張が解けたようにまだ笑いつづけているミカリに、咳払いをして言った。
そしてミカリも気をとりなおすと、用意していたのか、センリが顔を赤らめているのも気にせずに話しはじめた。
「実はね、話があるの。テルサのことなのだけど」
テルサとは、シギアの西部に位置し、ここ数年で急成長をとげている、鳴滝川河畔に栄える都市のことだ。
シギアでは、そのテルサ街を中心とする西部一帯を、テルサ地方と呼んでいる。シギアの中心に位置する王都とのあいだに連なるテ

ルサ連邦の影響もあり、冬場は王都よりも雪深い。
「テルサがどうかしたのか？」
ミカリは、特にテルサと縁があるわけでもない。なぜ突然その名がでたのか、センリには想像できなかった。
ミカリは、にっと笑って言った。
「気にならない？　どうしてあの雪深いテルサが、数年で成長してきているのか」
センリは思った。
たしかに、これから父の跡を継ぎ、国を引っ張っていかなければならない我が身の立場を考えると、知っていて損はない。テルサのように河畔にあり、そこそこ栄えている都市は他にもある。それも、テルサはもちろん、王都よりも雪の少ない地域だ。
「それなら、まずは父上に」
「だめよ」
センリの言葉を遮るように、ミカリが言った。
「帝には頼らないで、あなたが自分で調べるのよ」
大人びた目をして、ミカリはまっすぐセンリの目を見ながらつづけた。
「いい？　あなたには“あの技”があるじゃない」
（え？）
センリは口を開けたまま、しばらく考えてから言った。
「テルサへ、わたしが？」
ミカリは大きくうなずいた。
（“あの技”を……）
センリはわずかにためらった。
しかし書物を脇に置くと、ミカリを見て小さくうなずいた。
「わかった、少しだけなら」

テルサの中心地――テルサ街は、父の話や噂通り、たしかにむかしに比べて、建物の数や通りを歩いている人の数が多くなっている

気がした。といっても、最後にセンリがこのあたりへ来たのは、もう六年ほどまえのことになるのだけど……。
センリはしばらく街のようすを上から眺めていたが、当然ミカリがぶつけてきた疑問を解く手掛かりはつかめず、気がつくと、西の空からはどんよりと重たそうな黒い雲が、風に乗ってこっちへ向かってくるのが見えた。
（雷がきたら、このままでは危ない）
センリはそう思い、森のなかにちらりと見えた白くて小さなものを目掛けて、一気に降りていった。

上から見えた水たまりにむかって歩いていると、冷たい雨が降りだしてきた。はじめは弱かったが、次第に強まり、センリの視界を霞めた。
ミカリとのことが頭から離れ、久々の自由な時間を満喫しはじめていたころ、センリは大きな水たまりにたどりついた。そばの草かげには、藁の塊のようなものも見えた。
（人？）
センリは、よく宮に贈られてくる貢物のなかに、獣の毛皮があったことを思いだした。
（狙っているのか……）
センリは唾を飲み込むと、自分を見つめている藁の塊に意識を集中させた。
そのとき、視界が真っ白に染まり、とてつもなく大きな音が腹に響いた。
センリは驚きのあまり、一歩まえに飛び跳ねてしまった。するとそのまま、水たまりのなかへと吸い込まれていった。
センリが短い手足を必死に動かしてもがいていると、さっきまでじっと自分を見ていた藁の塊が、こっちへ向かって飛びだしてきたのが見えた。ちらりと見えた少女の目は、まっすぐこっちを見ていた。

けれどその少女も足場を崩し、深い水のなかへと悲鳴をあげながら落ちてしまった。
そしてつかの間、センリは少女のほうから襲ってきた波にのまれてしまい、目を閉じた。

押入れのなかで急にうなされだしたセンリを見て、ミカリはすっと血の気が引いていくのをおぼえた。
「センちゃん、どうしたの！」
大きな声をだすと、廊下に立っている見張りの者に気づかれてしまうと思ったミカリは、センリの耳元で何度も名前を呼んだ。
（早く、もどってきて……）

壺の底のように暗い闇のなかで、センリはおかっぱ頭のミカリのすがたを見ていた。それは、彼女が宮に顔を見せなくなりだすまえの、あの頃のすがただった――。

□

白く塗られた窓枠に、一羽の鳥が降り立った。
その鳥は、金色の鋭い瞳で部屋のなかを見渡すと、人影がないことを確認し、そっと部屋のなかに細い足を踏み入れた。
真夏の暑い陽ざしが差し込み汗がにじんでくるなか、そのときをずっと押入れのなかで待っていた少女は、こっそり白い歯をだして笑みをうかべた。
「センちゃんみっけ！」
押入れから飛びだし、喉の奥が見えるくらいに口を開いて声を張りあげているミカリを見て、センリは両手を上下にいそがしく動かして驚いた。
（ミカリ……！）
金色のおかっぱ頭をした少女の瞳は、まっすぐと自分を捉えてい

る。
「早くしないと、お父さま来ちゃうわよ」
なめるように見てくるミカリをまえに、センリの目は戸惑いの色を隠せなかった。
しばらくミカリとにらみあいをしていたが、廊下を早足にこちらへむかってくる音に気づくと、とうとうセンリは“あの技”をつかった。
みるみるセンリの魂が離れていくと、その鳥は本来の赤い瞳をとりもどし、ミカリのまえで一目散に窓から飛びだしていった。
桃色の鳥が青い空にひとつの点となって消えていったとき、ふすまのむこうから乳母の声が聞こえてきた。
「センリさま、スミでございます。間もなく婚儀のお支度を始められないと……」
「わかっておる、入れ」
センリがそう言うと、ゆっくりとふすまが開き、ふくよかなスミの顔が現れた。
スミは一礼をすると、センリに目をやり、すぐさま目を丸くして言った。
「まぁ、センリさま！　どうしてそのように汗だくで！」
スミはうしろで正座していた若い娘に小言でなにかを伝えると、用意していた布で、センリの顔にうかぶ汗を慣れた手つきで手早く拭きはじめた。
「一体、なにをして遊んでいらしたのですか？　こんなに汗だくになるまで！」
呆れた顔をして言うスミに、センリは無言なままでいた。ちらっとスミのうしろに目をやると、ミカリがおもしろそうに自分を見ているのが見えた。
しばらくして、スミに小言でなにかを言われていた娘が、お湯を張った桶をもってやってきた。

娘は布をお湯につけて硬く絞ると、スミよりも丁寧にやさしく、汗のにじんだセンリの身体を拭きはじめた。
そのとき、ミカリがにやにやとこっちを見ながら言った。
「センちゃん、もうお兄さまになるのだから、もう少ししっかりしないとね！」
センリは顔を赤らめると、ぷいっとミカリから目を反らした。
（嫌だな、ミカリは）
この宮のなかで、センリになんでも言いたいことを言える人間は、極わずかである。
父であるシギアの皇帝ナイルをはじめ、父がもっとも信頼しているヤンダン武将……。それから、乳母のスミと、なぜか、最年少で幼なじみのミカリだ。

ミカリはヤンダンの孫娘で、よく話す気の強い少女だ。父がヤンダンをすごく慕っているから、ミカリは唯一、宮のなかを自由に出入りできる皇族以外の子どもだ。
ミカリは、怒るとすごく恐い。耳の奥が突き抜けてしまうのではないかと思うくらいに、大きな声で延々と泣きわめく。そして最後は、ミカリが悪くても、いつも男の子なのだから女の子を泣かせるな、と僕がスミや父に説教されるのだ。

けれど、そんなときでも唯一味方をしてくれるのが、ミカリの祖父・ヤンダンだった。
ヤンダンはミカリが悪くても悪くなくても、父や僕に頭をさげてくれた。好きなお菓子や遊具もくれる。とてもやさしくて、シギアで一番つよい武人だった。
（おじいさんはあんなにやさしいのに、なぜミカリは……）
センリは、まだスミの陰でこっちを見てにやにやしているミカリを横目に、心のなかでつぶやいた。

全身の汗を拭ってもらってすっきりすると、今度はいよいよ、婚儀に出席するための衣を着せられはじめた。純白でとてもきれいだけれど、肩のあたりが重たくて動きにくい。
身支度を整えながら、センリは何度も、
「式のときは、きちんとお父さまとお母さまのうしろをゆっくりとついていくのよ」
とスミに言われた。
そして、そうするとまた、ミカリがスミのうしろから、
「よかったわね、センちゃんにもついにお母さまができるのね！」
と余計なことを言ってきた。

センリの父は、きょうで二回目の結婚だった。宮の召使いだった、ケイネルという平民の出の女人との結婚だ。
一度目の相手は、センリの母だった。けれどセンリの母は、センリを産んだときに死んでしまい、二度と帰らぬ人となった。
だから、センリは母の顔は、肖像でしか見たことがない。どんな声をしていて、どんなふうに笑う人だったのか、全くわからない。
父やヤンダン、スミが言う、明るく、気さくで真のつよい女性だった、という言葉だけを頼りに、その面影を想像するしかなかった。

準備が整うと、センリはスミに、父と新しい母の待つ、宮の一番奥の間へと導かれていった。
（ミカリに話しておきたいことがあったのに……）
“あの技”をミカリに目撃されてしまってから、センリは気になって仕方がなかった。
（どうして、シギチョウがぼくだって、すぐにわかってしまったんだろう）
もしかしたら、とっくにミカリは気づいていたのかもしれない。
毎日暇を見つけては、だれにも見つからないように押入れのなかに隠れ、自分の身体を置いて、鳥や獣になって空や野山を駆けていた

ことを……。

センリの魂は、いつもはこの〈シギアの皇子〉の身体に宿っている。けれどそれが、まだ八才の自分には全然おもしろくなくて、大嫌いだった。

ほんとうは、こんな一日中宮のなかから出られない不自由な身体に入っているということは、ほんのひと時でも避けたかった。

センリにとって、人の身体も獣の身体も、肉体は皆、魂の乗り舟でしかなかった。

空を飛びたいときには皇子の身体を乗り捨て、鳥になるし、野山を駆けたければ、獣になって思いきり森のなかを走りまわった。まるで、舟を自由に乗り換えるかのように、肉体という舟を渡り歩いた。

いつしか、センリはこの生まれながらの不思議な能力を〈舟渡り〉と自分で名付けた。そして他の人には見つからないように注意をしながら、こっそりとつかってきた。

そう、こっそりと、慎重につかっていたはずなのに……。

ミカリに早く口止めをしておかなければ、とそんなことばかり考えていたら、婚儀はあっという間に終わった。

宮のまわりには大勢の観衆が集まり、広場は人で埋め尽くされた。

センリの父ナイルは、先代の帝よりもはるかに人気を集めていた。このことについて、スミはいつも言っていた。

「ナイルさまは、この国の偉い人と、そうでない人の区別をなくされたのです。ケイネルだって、いままでならどんなにナイルさまのことが好きでも、ナイルさまと結婚なんてあり得なかったのですよ。皇子も、帝を見習ってくださいね」

たしかに、父が帝になってからは、シギアの人たちの暮らしは見違えるように豊かになったと聞く。戦を終えたこともあるのかもし

れないが、観衆の人々もセンリには皆生き生きとしているように見えた。
そんな父を、センリはもちろん、とても誇りに思っていた。自分もいつかは、父のような立派な帝になりたいと願っていた。
（でも）
最近は、複雑なのが正直な気持ちだった。特に、舟渡りをしたときなんかは、つよくそう思った。
（父上は、気づいているだろうか）
婚儀のあとの宴で、幸せそうにケイネルと見つめあって笑っている父のすがたを見て、センリは思った。
そのとき、うしろから肩を突かれて、センリはうしろを振りかえった。
普段よりも鮮やかな色の衣をまとい、髪に花飾りをつけたミカリが立っていた。
「ねぇ、赤ん坊はいつ生まれるのかしら」
ミカリはちらちらと父のほうを見ながら、にこにこして言った。
「知らないよ。ぼくに聞かないでくれ」
センリはぶすっとした顔で言うと、はっとあることを思いだし、ミカリに言った。
「ミカリ、さっきのことなんだけど。あれ、絶対にだれにも言うなよ」
ミカリは一瞬とぼけた顔をすると、妙にお姉さんぶって言った。
「……仕方ないわね、センちゃんがそう言うなら。二人だけの秘密ね！」

□

ミカリの声に呼ばれてセンリが目をさますと、青ざめた顔で自分を見つめている少女の顔が、目にうつった。
「センちゃん……！」

ミカリはほっと息をつくと、額にうかんでいた汗をぬぐった。
センリは重たい身体を起こして、心配そうに自分を見ているミカリに言った。
「池に落ちたんだ。はっとしたよ。もう終わりかと思った」
ミカリは一瞬口元を固く結んだが、ふっと息をだして笑った。
「まぬけな皇子ね」
センリは頬を赤らめて、ミカリをにらみつけた。
「だれにも言うなよ」
「二人だけの秘密ね」
あのときと同じ顔をしてそう言うミカリを見て、センリも声をだしてミカリと笑いあった。

三　滝壺

三　滝壺

夏祭りをひかえたある日の昼下がり、ミヤはお祭りにつかう笛を持って、あの山へと入っていった。

はじめてギンに会ったときはまだたくさん残っていた雪も、いまはもう融けてしまってどこにも見あたらなかった。山のなかは静寂を保ち、ときおり吹きつける心地よい風が、生い茂る夏草やミヤの頬をなでた。地面にはたくさんの枝や葉が落ちていて、布団のようにふかふかとしている。

鳴滝川につくと、ミヤはしばらく川上にむかって岸を歩いていった。川はきょうも、陽ざしを浴びて光りながら、うねるように流れている。

ミヤは立ち止まり、大きく息を吸った。この川へ来ると、不思議と心が落ち着き、全身に力がみなぎってくる気がした。耳を澄ませば、ギンが頑なに行くのを拒んだ滝壺のあるほうから、水の落ちる音が聞こえてきた。

頭にふっと蘇ってきた濁り池でのできごとを払うように首を振ると、ミヤは川上を見つめた。

（このまま川岸を歩いていけば……）

水の流れる音を聞きながら、ミヤはゆっくりと足元に気をつけながら歩きだした。

岩場をのぼっていったとき、ついに滝壺がミヤの目のまえにすがたを現わした。

激しい音をたてて流れ落ちる水は、しぶきとなって風に乗り、ミヤの乾いた衣を湿らせた。深い淵には、透き通る水が溜まっている。

ミヤは角ばった大きな岩のうえに静かに腰をおろすと、衣と帯の

間に挟んでいた笛をとりだした。そして、そっと指穴に指を置き、口をあてた。
そのとき、滝壺のまわりに生い茂る木々の底から、細く高い音が響き渡り、ミヤは辺りを見回した。笛のようなその音は、長く尾を引くように鳴りつづけている。
（なんの音？）
毎日田畑へ行って作業をしていたが、このような音を聞いたのははじめてだった。
（鳥ではない）
ミヤは思った。それなら、この音は一体なんだろう……。そう思いしばらくその音に聞き入っていると、次第に音は小さくなり、やがて聞こえなくなった。辺りは何事もなかったかのように、また滝を流れ落ちる水の音だけになった。
音が止んでからも、ミヤは森を見つめ、耳を澄ましていた。小鳥が枝から枝へと飛び移るたびに、葉がカサカサと擦れる音が聞こえてきた。
気のせいだったのだろうか。そう思ったとき、突然対岸の森の奥から、大きな破裂音が聞こえ、ミヤは身体を硬直させた。
（銃声だ）
狩人が獣でも狙っているのだろう。また一発、また一発とその音は聞こえてくる。ミヤは顔をゆがめながら、その音が鳴り止むのを待った。心を撃たれ、ぽっかり穴が開いたような哀しい気持ちがした。

「ミヤ」
背後から名前を呼ばれて、ミヤはうしろを振りかえった。
ギンが、こっちを見て立っていた。
「ギン、どうしてここに」
ミヤが驚いてそう言うと、ギンも言った。
「それはこっちのセリフだよ。あんなに危ないって、言ったじゃな

いか」
ギンが鋭い目で見てきたので、ミヤは戸惑って言った。
「……ごめんなさい。でも、大丈夫でしょう？　ほら」
ミヤが笑みをうかべたとき、また森の奥から、一発の銃声が聞こえてきた。
「……この辺りは、狩人がよく来るんだ。獣たちが飲み水や魚を求めて集まってくるから、そこを狙っているんだよ。行こう」
ギンは暗い目をしてそう言うと、ミヤのまえに手をだしてきた。
ミヤはなにも言わずにその手をとると、ギンのあとについて岩場をおりていった。

滝壺が遠ざかり、水の落ちる音が小さくなってきたとき、ミヤはギンに聞いた。
「もしかして、ギンが危ないって言ったのは狩人のせい？　わたしにあの銃声を聞かせたくなかったから？」
ギンはちらっとミヤの目を見たが、なにも言わずに黙ったまま歩きつづけた。
仕方がないので、ミヤは話を変えることにした。
「春に一緒に川で遊んだでしょう？　あの日の帰り、わたしのおじいちゃんを見たのを覚えてる？」
ギンはうなずいた。
「覚えてるよ」
ミヤはそれを聞いて安心すると、笑って言った。
「おじいちゃんがね、わたしのことをからかうのよ。ミヤの隣にはだれもいなかったって。おかしいでしょう？」
ギンは表情を変えずに、ずっとこっちを見ている。それを見て、ミヤはつづけた。
「よく言われるの。ミヤはおかしな子だって。
でもたしかに、時々不思議な夢を見るの。雛鳥が巣から落ちてしまったり、獣が怪我をしたり、池から落ちたりする夢。

それで、目を覚ましてその場所へ行くと、ほんとうに雛鳥が巣から落ちていたり、獣がいまにも池のなかへ落ちそうになっているの。

このまえも、それで池に落ちたソフを助けようとしたら、わたしまで落ちちゃった」

ミヤが照れながら話しているのを、ギンは静かに聞いていた。

「あと……」

そこまで言いかけて、ミヤは話すのを止めた。

オウキから聞いたまだ乳飲児だったころの話をしようかと思ったけれど、突然そんなことを言われても困るかと思い、止めた。

「わたしは、生きているかもわからない親に似ただけだと思って、全然気にしてないけどね」

ミヤは、ゆっくりと風に乗り流れていく雲を見あげた。

すると、突然ギンが言った。

「ミヤのお母さん、知ってるよ」

（え？）

ミヤは足を止めて、ギンのほうを見た。

はじめは聞き間違いかとも思ったけど、たしかにギンは、静かな声で言った。

（お母さんを知っている……？）

口を開けたまま呆然と立ち尽くしているミヤを見て、ギンも立ち止まって言った。

「お母さんの話、聞きたい？」

ミヤは、迷った。ずっと、母はどんな人だったんだろうと気になってはいたけれど、いざ聞くとなると怖かった。

オウキには、気がついたころには父も母も、星になったのだと聞かされていた。

心のなかでは、もしかしたらまだどこかで生きているかもしれない、と祈るように思うこともあったけれど……。なんだかんだで、ミヤはオウキとの暮らしには満足していたし、オウキの言うとおり、星になってしまったのだと思っていたほうが楽でもあった。

生きていたところで、置き去りにされていた私はただ嫌われて捨てられただけかもしれないし、もしそうなら、ほんとうは生まれてきてはいけなかったのだと、そんなことばかり考えてしまうからだ。

ずっと黙ってこっちを見ながら、ミヤの返事を待っているギンに、ミヤは言った。

「どうして、わたしのお母さんを知ってるの？」

ギンはなにかを思いだしているかのように、すこし間を置くと言った。

「さっきの滝壺に、よく赤ん坊を背負って来ていたよ」

（赤ん坊と滝壺に？）

ギンが言うとおり、ほんとうにそれが母なら、その赤ん坊はミヤということになる。

一体、あの滝壺になにをしに行ったのだろう。自分と同じようにこの川は心が安らぐから、それで行ったのだろうか。……というよりも、自分が川へ行って不思議と安らぐのは、そうやって小さなころに母が連れていってくれていたからなのだろうか……。

ミヤは波のように次々と押し寄せてくる疑問を、必至に整理しようとした。

「どうして、わたしのお母さんだってわかるの？」

ギンは、なにも答えなかった。なにかを秘めているように、堅く口を閉ざしている。

「いつ、見たの？」

恐る恐る聞くと、今度は思っていたとおりの言葉がかえってきた。

「もう、九年はまえだよ」

オウキがミヤを連れ帰ったというのも、ちょうどそのくらいまえだった。

レーネのような小さな村では、村人たちは皆、どの子がどこの家の子か、見ればすぐにわかる。けれどオウキの話では、ミヤがどこの家の子かわかる者はだれもいなかったという。

（わたしは、ほんとうはレーネの子でもない）

母は、滝壺で身を投げたとでもいうのだろうか。赤ん坊のミヤをレーネに置き去りにして。

ミヤは大きく息を吐くと、
「いいの。わたしには、おじいちゃんがいるから」
と言って歩きだした。
するとギンも、なにも言わずにゆっくりとミヤにつづいて、歩きだした。

「ギンのお家はどこなの？」
ずっと黙って川沿いをくだっていたとき、ミヤは沈黙を破るように言った。
「滝壺の先にある村だよ」
それを聞いて、ミヤはまた足を止めた。
「ごめんなさい。なにも知らなくて……。こっちまで来たら、帰るのが大変でしょう？」
そう言うと、ギンは笑った。
「大丈夫だよ、近道があるから」
（それならいいか……）
ミヤは安心すると、手に持っていた笛を見せてにっこりして言った。
「きょうわたしが川へ来たのは、この笛を吹く練習をするためだったの。あさって、村の夏祭りで吹くの。
お祭りには、テルサから来た人たちが屋台もだしてくれるのよ。夜は暗いから、来れたらでいいからギンも来て。一緒に屋台をまわりましょう」
ギンはミヤの話を聞いてうなずくと、
「わかった、行けたら行くよ」
と笑顔で言ってくれた。
「それじゃ、きょうはここで。いつも送ってもらうのは悪いから、

またね」
ミヤは手を振って、ギンとわかれた。

夏祭りのその日は、昼間は陽が照りつけていたものの、夕方にはにわか雨が降った。
ギンは、祭りには来なかった。
（やっぱり遠いし、無理だったのかな）
ミヤがそんなことを思っていたとき、一緒にいた隣の家のソジが、屋台を眺めて言った。
「そろそろ屋台は終わりだから、神社のほうで送り火がはじまるよ。行こう」
ソジは焼き菓子にかじりつきながら、神社へむかって走りだした。
「ちょっとソジ、待ってよ」
ミヤも慌ててそう言うと、ソジのあとを追った。

神社のまわりには、すでに大勢の村人たちが集まっていて、ソジやミヤに気づいた村の子どもが、こっちにむかって手を振ってきた。
ミヤはソジとおしゃべりをしながら、人だかりの中心に積まれたハイの木に、火がつけられるのを待っていた。
そのとき、ソジの父・ヤソンがこっちへむかって走ってくるのが見えた。
「悪い、ソジ。うっかりして夕立ちでハイの木を濡らしてしまったよ。なかなか火がつかないから、いますぐこの桶に七池の水を汲んできてくれないか」
ソジは空の桶をうけとると、わかった、と一言返事をした。
「わたしも行く」
「いいよお前は」
そう言ったけど、さっき来た道を走ってもどりだしたソジを、ミヤも走って追いかけた。
ソジはレーネ村の村長の家の息子で、とても責任感がつよい。な

んでも任されたことは一人でやろうとする性格で、父に七池と呼ばれた七色の池にむかって、ものすごい速さで駆けていった。
村外れなだけあって、七色の池まで来ると、お祭りでにぎわう人の声は全く聞こえなかった。辺りは薄暗く、虫の声だけがしている。灯りがないから、月の光だけが頼りだった。
「気をつけてね、落ちないでね」
やっと追いつき、すでに池の水を汲みはじめていたソジにむかって、ミヤは言った。
「手伝おうか？」
ソジは大丈夫だ、と一言かえすと、池の水が入れられた桶を軽々と持って、また来た道をもどりはじめた。
「便利だよな、この池の水は」
黙って並んで歩いていると、ソジが口を開いた。
「知ってるか？　王都のほうじゃ、まだこの水はあまり知られていないんだってさ」
「え？　そうなの？」
驚いて聞きかえしたミヤに、ソジはすこし得意げになってつづけた。
「そうだよ。テルサでも、最近になってやっと使われるようになったくらいだよ」
（この水が知られていないなんて……）
レーネ村では、七色の池の水は村人の暮らしをささえる、とても大切な資源のひとつだった。木を切らなくても、この水を使えば簡単に火は点く。池に石を投げ入れると七色の輪ができることから、村人は〈七色の池〉や〈七池〉という愛称で呼んでいた。
ミヤは、ソジが持っている桶のなかでゆらゆらと揺れている月に目をやりながら、七色の池のない暮らしを想像してみた。
（もし、この水がなかったら……）
いまの畑仕事にくわえて、毎日木を切ったり、薪を集めに山へ入らないといけないかもしれない。寒い冬に入るまえには、それこそ

たくさんの薪を蓄えなければいけない。それから……。
ミヤは考えれば考えるほど、七色の池のありがたさを感じられた。
「あのさ」
ソジが、ミヤの顔をのぞき見てきた。
「今度、一緒に王都に行かないか」
「え？　王都に？」
ミヤは驚いてソジの顔を見た。
レーネ村から王都へ行くには、テルサ街へ行くよりも遠い。馬車で行っても、半日以上はかかる。
「今度、皇女さまの誕生式典があるそうなんだ。宮城から父さんに招待状が来たんだよ。……ちょうど、王都の暮らしも見れると思うんだけど……」
〈皇女さま〉と聞いて、ミヤは胸を躍らせた。王都へ行くのはもちろん、式典にでられるなんて、滅多にないことだ。それからソジが言う王都の暮らしというものも、興味がある。
「でも、わたしなんかが一緒に行っていいの？」
それを聞いて、ソジは笑って言った。
「問題ないさ。……別に、行きたくないならいいけど」
ソジは、気が変わるのが早い。やっぱり来るな、なんて言われるまえに、返事をしなければいけない。
ミヤはそう思い、慌てて言った。
「い、行きたいです！」
すると、ソジは満足そうに微笑んだ。

翌日、ミヤは再び鳴滝川のある山へと入っていった。
けれど、どんなに川辺を歩いていても、とうとうギンは現れなかった。
やがて日が沈みはじめると、ミヤは適当に辺りに茂っていた背の低い木から青い葉を一枚もぎとり、葉の裏に爪で文字を書いていった。そして葉がぎっしり文字で埋まると、目立つ岩のうえに風で飛

ばないように、石を重ねて置いた。
（気づいてくれるといいな）
そう思いながら、ミヤは足早にオウキの待つ家へと帰っていった。

「どうして鳴滝川へは行っちゃいけないの？」
寝床で横になりながら、隣でいまにも寝息をたててしまいそうなオウキに、ミヤは聞いてみた。
オウキはすこしうなると、目を閉じたまま言った。
「あの川にはな、……だよ」
「え？」
よく聞きとれなくて、ミヤは聞きかえした。
「なに？　おじいちゃん」
すると、オウキはまたも聞きとりづらく言った。
「……喰らうんだ……」
（喰らう？）
「なにを？」
ミヤはそう聞きかえしたが、オウキの言葉は返ってくることなく、やがて静かな寝息が隣から聞こえてきた。
（なにが、なにを喰らうんだろう）
オウキの寝息を聞きながらそんなことを考えていると、次第にオウキの寝息は遠ざかり、ミヤは深い眠りに落ちていった。

ミヤが鳴滝川を去っていったあと、岩のうえに残されていた青い葉を、興味深そうに見る一つの影があった。
一字一字丁寧に刻まれたその文は、ギンへ充てたものだった。

――ギンへ
友だちと王都の
誕生式に行ってきます
見たら声かけてね

ミヤ

四　王都

四　王都

ミヤが同行したレーネ村長一行が王都へたどりついたのは、誕生式典の前日の昼だった。

王都は明日の式典をひかえ、お祭りまえのような高揚感に満ちていた。

農村のレーネとは違い人通りも多く、行き交う人は皆、明日の式典のことを口ずさんでいた。

「すごいな。おれ、ここに住みたい！」

目を輝かせてそう言ったのは、ソジの親友でミヤと同じように同行させてもらっている、ノキだった。

ノキはむかしから駆けっこが得意で、村のひとまわり大きい子にも劣らないくらいの俊足の持ち主だ。本人の話では、妹とけんかをするたびに追いかけ逃げ回り、自然と足が鍛えられた……とか。

それが事実なのかはだれにもわからないが、たしかに時々、妹と家のまえを駆けまわったり、母親に追いかけられているところを見かけることはあった。けれどノキはいつも、その自慢の足で、妹や母の目を眩ませていた。

「宿へ荷物を置いたら、好きなところへ連れて行ってやるぞ」

ソジの父が、興奮しているノキに言った。

「あそこに見えるのが、王宮？」

高い丘のうえに天を突くようにそびえ立っている重厚な建物を指さして、ミヤが言った。

「そうだ、あれが王宮だ」

「さすがに大きいなぁ、おれの家とは大違いだ」

隣で感嘆の声をあげるノキに、ソジが言った。

「ばか、レーネの家と比べるやつがあるか」

二人の言うとおり、王宮どころか、王都の家々はレーネよりも皆、立派できれいな家ばかりだ。やはり、王都とどこにでもある農村では、暮らしの環境も全く異なるようだ。
「あの王宮も、戦をしていたときには結構な被害がでたそうだ。けれどそれでも、いまの帝は傷ついた兵を、たくさん受け入れられたのだ。
戦が終わったあとも、国民の生活を優先して、しばらく建物の再建はしなかったそうだよ」
まだ若く物知りな村長の話を聞いて、ミヤたちは感心した。
（シギアの帝は、やさしい方なのね）
冬の雪空の色をしている王宮を見つめながら、ミヤは明日の式典を待ち遠しく思った。
「皇女さまは、なんて名前なの？」
ノキが王宮を見あげながら、ソジに聞いた。
「イナ、っていうんだって」
イナとは、シギアの古い言葉で〈平和〉という意味をあらわす。
戦中に帝の座につかねばならなかった帝は、きっと娘の名前に、未来のシギアの平和を託したのだろう。

宿へ荷物を置くと、ソジの父は王宮のまえの広場に連れて行ってくれた。
その広場〈サベルダム（中央）広場〉は、王都で行われる様々な祭儀の会場となるところで、レーネの広場の何十倍もある。明日の式典にそなえ、すでにたくさんの出店が立ち並び、広場は人であふれていた。
「はぐれないように、気をつけろよ」
背の高い大人たちに囲まれて身動きがとれなくなっていたとき、まえのほうからソジの父の声が聞こえてきた。
するとその声に、どこからか答えるノキの声がした。
「おじさん、ちょっと早いよ」

さすがにこの人ごみのなかでは、ノキの俊足もお手上げのようだ。
ミヤも必死に皆からはぐれないように、時々ちらっと見えるソジの父の頭を追っていった。
しかし、しばらく歩いてからのことだった。
見失わないようにと注意しながら歩いていたものの、気がついたときには、ミヤはあっさり広場の隅で一人、たたずんでいた。
(どうしよう、皆を見失ってしまった)
宿の場所がわかっていたからいいものの、ソジたちは自分のことをさがしているかもしれない。
ミヤは必死に辺りを見回し、ソジたちが気づいてくれるようなどこか目立つところはないかとさがしたが、目立つといえば一般の人は立ち入れない王宮へとつづく坂のうえのほうだけだった。

宿へ帰ろうか迷っていたとき、ミヤのまえに一つの影が止まった。
はっとして顔をあげると、そこにはこっちを見て立っているギンのすがたがあった。
「ギン……!」
ミヤが驚いていると、ギンが言った。
「友達とはぐれたの?」
ミヤは小さくうなずいた。
「ギンも来てたのね」
すると、ギンはいつものように落ち着いた声で言ってきた。
「おいで、こっちだ」
ミヤはギンに言われたとおり、あとをついて行った。

ギンははぐれないように、何度もミヤのほうを振りかえっては、足を止めてくれた。
そんななかで、こんなときに悪いとは思いつつも、ミヤはギンに言ってみた。
「ギン、夏祭り……来れなかったね」

するとギンは、すぐに答えた。
「行ったよ。けど、ミヤはほかの子と一緒にいたから、悪いと思って帰ったんだ」
（ほかの子……ソジ？）
「あ……」
ミヤは頬を赤らめた。
「ソジは友達だから、来てくれてよかったのに……。ごめんね」
ギンはそれを聞いても、何も言わないまま、どこかへむかってさらに人ごみのなかをかき分けていった。

ギンのあとを追っていたとき、ふいにだれかに手首を掴まれて、ミヤはうしろを振りかえった。
ソジが息を切らしながら、立っていた。
「ソジ！」
「こっち」
ミヤの言葉を遮り、ソジは手首をひいて方向を変えて歩きだした。
「待って、ソジ」
ミヤは慌てて振りかえり、ギンのすがたをさがした。
けれど、さっきまでミヤを見失わないように気にしながらまえを歩いていてくれたギンのすがたは、どこにもなかった。
「なにしてるんだよ、早くこいよ」
ソジはイライラしながらそう言うと、ミヤの手を引っ張った。
「あ、ごめん」
ミヤはギンのことを気にしながらも、ソジのあとをついていった。

ソジのあとをついていくと、ソジの父とノキが、出店のそばの休憩所でなにかを食べているのが見えた。
二人はこっちに気づくと、手を振ってきた。
「おいミヤ、どこ行ってたんだよ。一人で見に行くなよ。ずっと、ソジがおまえのことさがしていたんだぞ」

ノキが、呆れた顔をして言ってきた。
ソジの父は、いいさいいさと笑って、なにか食べるかと聞いてきた。
「ごめんなさい」
ミヤは顔をまっ赤にして、ソジたちに謝った。
「いいよ、別に」
そう言うとソジは、父にあれが食べたいと言って、焼きものを売っている出店を指さした。

結局、その日はずっと、日が沈み宿へ帰るころになっても、ミヤはギンのことが気になって仕方がなかった。
(悪いことしちゃったな)
夏祭りのときのように、ギンはソジを見て、わざといなくなったのかもしれない。
ミヤは、そっとため息をついた。
夏祭りにギンが来てくれていたことに、ミヤは全然気づかなかった。すぐに気づくように、注意していたのに……。
ミヤは後悔の念でいっぱいになりながら、ソジたちと歩いて宿へむかった。

まえを歩くソジの父とノキの声を聞きながら、ミヤは、紅く燃える空の下で、黒くうかびあがっている遠くの山々を見つめていた。
「あの山、大きいね。なんていうのかな」
ミヤがそう言うと、隣を歩いていたソジもその山々に目をむけた。
「あれは、ワール山脈だよ。あの山を越えると隣の国にでるんだ」
さすがにソジは、父親と何度か王都に来ているだけあって、自分やノキよりも王都のことには詳しかった。
感心しているミヤに、ソジはさらにつづけた。
「レーネまで流れてくる鳴滝川は、あの山から流れてくるんだよ」
「え、鳴滝川が？」

ミヤは口を開けて山を見つめ、つかの間忘れかけていたギンのことを思いだした。
（あのきれいな水は、あの山からくるんだ……。ギンは、知っているかな）
ミヤは陽に浴びて光り、うねるように流れていた川を思いうかべた。
じっと、動くわけでもないその黒い山を見つづけていると、時折りシギチョウが群れをなして夕焼け空をよこぎっていった。

ミヤにつられて山を見ていたソジに、ミヤは言った。
「ソジは、鳴滝川に行ったことある？」
ソジは、ぱっとミヤのほうに視線をむけると、首をふった。
「鳴滝川には行くなって、まだじいちゃんが生きていたときよく言っていたからね」
それを聞いて、ミヤも目を丸くして言った。
「わたしのおじいちゃんも！　あそこの川は、なにかがなにかを喰らうからって」
ソジは瞬きをすると、すこし考えて、なにかを思いだすように頭を掻きながら言った。
「そういえば、そんなこと言っていたっけ。人を喰らうやつがいるって」
「人を？」
ミヤは一瞬、背筋を冷たいものが走るのを感じた。
まさか人を喰らうものがいたなんて思ってもいなくて、はじめてあの穏やかに流れる川に、恐怖をおぼえた。
「なにが人を喰らうの？　獣？」
全身が耳になったかのように、高まる自分の鼓動を聞きながら、ソジの顔をそっとのぞきこんで言った。
ソジは、急に顔色を変えて聞いてくるミヤを見て笑った。
「ばかだなぁ、ほんとにそんなのがいるわけないだろう。どうせ、

川に落ちたら危ないからって、嘘をついてるんだよ」
ミヤは口を曲げると、自分を見て笑っているソジをにらみつけた。
「それで、おじいちゃんはなにが人を喰らうって言っていたの？」
笑い飛ばしても珍しくしつこく聞いてくるミヤに、ソジは苦笑をうかべながら言った。
「ナリノカミだよ」
ミヤは、息を止めた。
そして肩を落とすと、深いため息をついた。
「ナリノカミは、小正月のお祭りのことじゃない。お祭りが人を喰らうなんて、はじめて聞いたわ。ほんとうにそう言ったの？」
「うん、たしかね」
呆れて聞いてくるミヤに、足元に転がっていた小石を蹴りながら、ソジはさも面倒くさそうに答えた。
（もう一度、おじいちゃんにちゃんと聞いてみよう）
ミヤは心のなかでそう決めると、まえを歩いているソジの父の、大きな背に目をむけた。
ノキと並んで、楽しそうにきょうのことを振りかえりながら歩いているそのすがたは、まるで親子のようだった。
（お父さんは、どんな人だったのだろう）
母がレーネの人ではないように、父もきっと、レーネの人ではない。赤ん坊の自分を、見知らぬ村に一人置き去りにしなければならなかった父と母に、一体なにがあったのだろう……。
ミヤは、隣で自分の顔を不思議そうに見てくるソジの視線に気づくことなく、ずっと二人の背を見て歩いていた。

王都の夜の訪れは、レーネよりも早かった。
レーネでは村の至るところに、七色の池の水をつかった灯火（あかりび）が灯されていて、日が沈んでからも表を通る人の声が時々聞こえてきていた。
けれど、王都では式典の前夜だというのに、宿のあたりまで来る

と人影は消え、灯火も炭を用いたものが所々にぽつんとあるだけだった。
立派な民家も、窓のむこうは薄暗い家ばかりで、寝静まったようにしんとしている。
（これが、ソジの言っていた王都の暮らしなのかな）
宿に帰り、でてきたご馳走を食べながら、ミヤはぼんやりと考えていた。
王都では、レーネではあたりまえにつかわれている灯り具が、外でも宿のなかでも、全くつかわれているようすがない。
皆燃える水のかわりに、少ない炭や薪を無駄のないようにつかって、細々とした灯りのもとで暮らしているようなのだ。
ミヤがそのことに気づいたことを察したかのように、ソジが目で合図をしてきた。
ミヤは黙ってうなずくと、ソジの父やノキに気づかれない程度に、微笑んでみせた。

夕餉や風呂を済ませると、四人は明日の式典にそなえ、早く床についた。
窓から差しこむ月明かりに照らされて、ぼんやりとうかんでいる天井を見あげながら、ミヤはきょう一日のことを振りかえった。
ギンはあのとき、どこへむかっていたのだろう。もしかしたら、ソジのいるところへ連れて行ってくれたのだろうか。
きょうはだれと来て、どこに泊まったのだろう……。
そんなことを考えていると、いつの間にか、ノキやソジの父が寝ているほうから、静かな寝息が聞こえてきた。
ミヤも眠ろうと目を閉じたとき、隣で横になっていたソジが、ささやくように言ってきた。
「あしたは、はぐれないように気をつけろよ。もうおれ、さがさないからな」
ミヤは昼間、ソジが自分をさがしてくれていたということを思い

だし、礼を言った。
そしてそのまま目をつぶっていると、深い眠りに落ちていった。

□

ミヤたちが広場へでかけていたころ、宮のなかでは明日の式典をまえに、小さな宴が開かれていた。豪華なご馳走が並べられ、ひときわにぎわっている人だかりの中心には、まだ生まれたばかりの赤ん坊――皇女イナが、母に大事そうに抱かれていた。

「よかったわ、無事に生まれてくれて」
センリの隣でそう言ったのは、ミカリだった。
「そうだな。母上も安心しているだろうね」
父と母が結婚したのは、六年まえのこと。母は六年という長い月日を経て、やっと待ちにまった我が子を、抱くことができたのだ。
（ほんとうは、もうすこし早く生まれるはずだったのかもしれないけれど……）
父と母を見ながら、ミカリが暗い目をして言った。
「また流れてしまったら、どうしようかと思ったわ」
センリは、それを聞いてわずかに苦笑をうかべると、無理やり話を変えて言った。
「あしたは、国中の長たちが集まるけれど、テルサの長と話をしてみようか」
するとミカリは、一瞬だけいつものミカリの顔にもどったが、やはりイナのことが気になるのか、また暗い目をしてイナのほうを見つめて、返事も上の空だった。
センリはやれやれと息をつくと、目のまえの料理に手をつけた。鳥の肉を、丸ごと蒸してタレをかけた料理だった。
いつもは舟渡りをして獣の身体を借りるセンリだったが、こうして料理にだされれば、なんでもおいしく食べた。心のなかでは、悪

いとは思いつつも……。
ミカリにも、むかしはよく突っ込まれたものだ。
「もし、獣になっているセンちゃんが捕まえられて、料理になってわたしの口に入ったら、嫌だな」
とか、冗談でもないことをよく真顔で言っていた。

（そんなの、こっちだって嫌だい）
センリはミカリの言葉を思いだし、心のなかでつぶやいた。
センリがご馳走に手をつけだすと、ミカリも一緒に食べはじめた。むかしは好き嫌いが多くて大変なようだったけど、いまはしっかりなんでも食べられるようになっていた。
そんなミカリを見て、センリは言った。
「ミカリは、やっぱりこの六年で成長したみたいだね」
ミカリは顔をあげると、得意げに言った。
「まぁね。わたしも、立派なお嫁になるのだから」
「お嫁？」
「そう。わたしももう少ししたら、お見合いをしていいお嫁になるわ」
ミカリはいつも通り、にっこりと微笑んだ。
（そうか、ミカリは見合いをするのか……）
結婚をしたら、ミカリはまた空白の六年間のように、宮には顔を見せなくなるのだろう。
ミカリの相手は大変だろうな、と思いつつ、センリはこっそり胸に寂しさをおぼえた。

五　六年まえ

五　六年まえ

ミカリが宮に訪れなくなったのは、きっと彼女は、心のなかで自分がしてしまったことに責任を感じていたからなのだろう。

センリはそこまで気にすることはないと思っていたけれど、六年もの間ミカリはひとりで、背に重りを背負いつづけていたのかもしれない。

□

年も暮れ、ケイネルが子を身ごもると、ミカリは毎日のように宮に訪れるようになった。

まだまだ先だというのに、子が生まれる日が楽しみで仕方がないのだろう。宮に来ても、いままでのように自分に会いにくるのではなく、まっすぐとケイネルのほうへむかっていくことが多かった。

（ミカリはのんきでいいな）

センリはというと、この頃一段と〈舟渡り〉をすることが多くなっていた。

ミカリやスミが部屋を訪れなくなると、父も戦や婚儀を終えて、国の再建に力を入れはじめ、いそがしい日々を送るようになっていた。

そうやって皆がなにかに夢中になっているように、センリも〈舟渡り〉をすることに夢中になっていたのだ。

周りが、あらたに宿ったあたらしい命のことでにぎわう輪から、こっそりとはずれていくように……。

鳥も巣立てばひとりで生きていく。センリにはそのことはよくわかっていた。
けれど人であるセンリには、それは無理だった。鳥のように思いきってひとりで生きていくのは、とても勇気がいる。
センリは〈舟渡り〉の技をつかうたびに、自分はなにかから目を背け、逃れているだけがして、次第に心に影を宿すようになっていった。

ケイネルに付きっきりになってしまった乳母のスミの替わりに、あらたにセンリの世話係を任されるようになったのは、ターナンという小柄で髭を生やした、初老で物知りな男だった。
彼ははじめて会うなり、自分のことは〈じい〉と呼んでくれと言ってきた。よく話す、親しみやすい世話係である。

じいはテルサの生まれだったので、シギアのなかでもテルサ地方のことにはとても詳しかった。
そして勉強嫌いなセンリのために、じいはよく、テルサでうたわれる唄をうたってくれた。それは〈ナリノ唄〉という、シギアの農村に広く伝わる小正月の祭り〈ナリノカミ〉の際にうたわれる唄だった。

――森に眠り　泉に眠る鳥よ
ナリを渡り　山を越え　里に降りん
ハイ喰い　羽を休まば　立ちあがれ
ホーイ　ホーイ

きょうも何気なくその唄を聴いていたセンリは、ふと気づいた。
「じい、ナリとはなんだ？」
すると、彼は迷うことなく答えた。
「ナリとは、鳴滝川のことでございます。

この唄が特によくうたわれるテルサの村々は、鳴滝川の恵みで栄えております。
小正月で行われる祭りは、その川の恩恵に感謝しながら、作物の豊作を祈願するために行われるのです」
「そうか」
王都で生まれ育ったセンリは、〈ナリノカミ〉は聞いたことはあったものの、実際にそれを自分の目で見たことはなかった。
「ナリノカミでは、子どもたちが雪洞をつくるのです。
そして夜になると、その雪洞には灯りがともされて、とても幻想的で美しい世界が広がるのですよ」
その後も、じいは〈ナリノカミ〉について熱く語ってくれた。
センリはじいが熱く語っているのを、ぼんやりと思いうかべながら聞いていた。

それから数日後のある日、ミカリが久々にセンリの部屋へとやってきた。
ミカリは部屋に来るなり、説教をするときのスミの顔をして言った。
「センちゃん、昨日お勉強が嫌で逃げだしたでしょう？」
センリは無言のまま、ミカリを見つめた。
たしかに、昨日は勉強をする気分にはなれなくて、じいが部屋に来るまえに逃げだしていた。
だれからかは知らないが、ミカリはそのことを聞きつけて、きょうは説教をしにきたようだ。
「いいから、あっちへ行ってくれ」
センリは膨れた顔でそう言うと、ミカリに早く帰るようせきたてた。
するとミカリは、急に顔を赤くして、口をへの字に曲げると、目に涙をうかべた。
（あ、忘れてた……！）

センリは、ミカリが怒ると泣き虫になるということを思いだし、慌てて言い直した。
「わ、間違えた！　あ、あっちへ行かないでくれ！」
頭が混乱していたセンリは、とっさにそう言ってしまった。
涙をこすって笑みをうかべているミカリを見ながら、センリはほっとしつつも、後悔の入り混じった吐息をもらした。

センリに言われた通り、ミカリは部屋をでるのでもなく、センリのまえに居座ると、いつも通りにこにこして言ってきた。
「きょうは、鳥にならないの？」
センリは、思わず息をのんだ。
そして真剣な目をすると、
「ぼくは、鳥にはなれないよ」
と、とぼけて答えた。
けれど、ミカリは当然それでごまかせるような娘ではない。
ミカリはとぼけるセンリに、さらに詰めよってきた。
「わたしね、知っているのよ。センちゃんが押入れのなかに入って動かなくなるときは、鳥になっているって」
センリは、手に汗がにじんでくるのを感じた。
（やっぱり、ミカリは気づいていたのか……）
思い返せば、シギチョウになっていたのがばれてしまったあの日も、ミカリは押入れのなかから飛びだしてきた。
（もしかして）
「ぼくが押入れに隠れるところを見たのだな」
センリがそう言うと、ミカリは満面の笑みをうかべながら、大きくうなずいた。
「でもどうして、シギチョウがぼくだってわかったのだ？」
「だって、瞳が金色だったんだもの」
（それだけで……）
センリは思わず、言葉を失った。

シギチョウは、淡い桃色の身体をしていて、その瞳は燃える夕焼け空のように赤い。
一方のセンリはというと、夕日に照らされて輝く山のように、黄金色の瞳をしていた。
〈舟渡り〉をして皇子の身体は押入れに置いていても、どうしても瞳の色だけは金色のままだった。どうやらミカリは、あの日のたった一度だけで、それを見抜いてしまったようだ。
(油断するのではなかった)
センリはあの日、照りつける夏の陽ざしが耐えられず、すこしの間、羽を休めようと部屋にもどったことを悔やんだ。

そんなことも知らず、ミカリは目を光らせて聞いてきた。
「あれ、どうやるの？　わたしも鳥になりたい！」
センリは息を吸うと、静かに言った。
「あの技は、だれにでもできるわけじゃない。だから、ミカリには……教えてあげたいけど、教えられないよ」
また下手なことを言ってミカリを泣かせないように、センリは十分に気をつかって言った。
「センちゃんだけなんて、ずるいな」
口をとがらせているミカリを見て、センリはすこし悩んでから、言った。
「それなら、教えるかわりに、あの技をつかってなにかして欲しいことがあったら、言ってくれ。なんでもしてあげるよ」
ミカリはそれを聞くと、必死になにか考え事をしはじめた。
けれど結局、この日はなにも思いつかなかったようで、また今度来ると言い残すと、軽い足取りで部屋をあとにした。

後日、ミカリは分厚い書物を持って再び部屋にやってきた。
彼女の願い事は、その書物に載っていたハイの菓子を食べてみたい、という至って普通なものだった。

「ハイの菓子なら、宮の者に頼めばいくらでも食べられるじゃないか」
センリが拍子ぬけて言うと、ミカリは首をふった。
「わたしは、宮のハイの菓子じゃなくて、小正月につくられる桃色のハイの菓子が食べたいの」
ミカリは持ってきた書物をひらくと、突きつけるように見せてきた。
そこには、通常のハイの菓子は、ハイの実を餡と練りあわせて白い団子包んだものであるが、テルサの一部地域では、小正月に限って桃色の団子がつくられている、ということが書かれていた。
（でも……）
「お供えものをとってくるのか？」
センリは、たしかに自分も見たことがない桃色のハイの菓子を食べてみたいとは思ったが、自分の立場を考えると、あまり気が進まなかった。
けれどミカリは、書物を腹に抱えて手を合わせると、センリの目を見てこびるように言ってきた。
「大丈夫よ。すこしお裾分けしてもらうだけだから。ね、お願い、皇子さま」
皇子さま、なんてミカリに言われたのは、はじめてではないだろうか……。
センリはそんなことを考えながら、迷っていた。
すると、待ちきれないミカリが言った。
「皇子さまは、民を幸せにしないといけないのよ」
センリは小さく息をつき、肩を落として言った。
「仕方ないな、一度だけだからな」
ミカリは目を光らせて、顔をほころばせた。
年が明けると、小正月はあっという間にやってきた。

センリはミカリと約束した通り、桃色のハイの菓子を手に入れるため、ミカリに留守番を頼むと、メクイ〈トビ〉の身体を借りて空にはばたいた。

幸い、空気は刺すように冷たかったが、雪は降っていなくて、陽が差し天候にも恵まれた。

センリはあらかじめ、じいから桃色のハイの菓子がつくられるのはどのあたりの地域かを聞いて、その地域の場所も念入りに地図で確認をしておいた。

宮から飛びだすと、ひたすら確認をしておいた目的地へむけて飛びつづけていった。

シギアの冬は、山々から人家まで、一面が白く染めあがり、陽ざしを浴びてきらきらと輝いていた。

けれど冬の空には、いつもは群れをなして飛んでいるシギチョウのすがたがなくて、センリは静けさを感じた。

シギチョウは冬が訪れると、シギアよりも暖かいサハン〈南〉の国へと飛んでいってしまう。お気に入りの鳥がいなくなってしまうこの季節は、センリにとって寂しい季節でもあった。

しばらく同じ方角へ飛んでいくと、センリはとある小さな村にたどりついた。子どもたちが雪洞のまわりで雪玉を投げあっては、楽しそうに走りまわっていた。

雪洞のうえをよく見てみると、藁のうえには宮でもよく見る白いハイの菓子と一緒に、ミカリが欲しがっていた桃色のハイの菓子がたくさん並べられていた。

こうしてうえから見ると、まるで鳥の巣のなかの卵のようだ。

大人たちは、きっと雪洞のなかにいるのだろう。時々笑い声が、円を描きながら上空を飛びまわっているセンリのもとまで聞こえてきた。

（いまなら、とれるかもしれない）
センリは藁のうえの桃色のハイの菓子に狙いを定めると、獲物を捕まえる獣のようにそれを目掛けて急降下していった。
子どもたちが驚いた顔で指をさしたり、口を開けて見ているまえで、センリは見事に狙った獲物――桃色のハイの菓子を捕った。
気をつけないと潰れてしまいそうなくらいにやわらかかった。
センリはこうして目当てのものが手に入ると、いそいで宮で待つミカリのもとへと飛んでいった。

宮につくと、センリはうれしそうに駆けよってくるミカリの手に例のものを渡し、本来の〈シギアの皇子の身体〉にもどった。
「ありがとう、センちゃん！」
ミカリは桃色のハイの菓子を、やさしく包み込むように小さな手で持って言った。
「半分、ぼくにもくれよ」
センリは冗談のつもりで言ったが、ミカリはよろこんで菓子をふたつにちぎると、片方をセンリに手渡してくれた。
そしてミカリの掛け声で、二人で同時に食らいついた。
桃色のハイの菓子の味は、白いハイの菓子となんら変わらず、ハイの実と餡が合わさった甘酸っぱい味が口のなかに広がった。
「おいしい！」
ミカリはソフのようにとび跳ねながら、笑みをうかべていた。
あっという間に食べ終わると、その後ミカリは、センリの〈舟渡り〉の旅の話を日が暮れるまで夢中になって聞いていた。
「センちゃん、ありがとう！　またね！」
辺りが薄暗くなったとき、ミカリはご機嫌なようすで笑顔で手を振って帰っていった。
まさかセンリは、その笑顔がそれから六年も見られなくなるとは、

このときはまだ心にも思っていなかった。

小正月からしばらくが経ったある日、センリは父に部屋にくるようにと呼ばれた。

父に暗い目をして言われたのは、ケイネルの子が流れた、ということだった。

（どうりで、最近突然ミカリが宮に訪れなくなったと思ったら……）

センリは、この頃気になっていたことがようやく解けて、息をついた。

ミカリは子が生まれることをすごく待ちわびていたから、元気がなくなってしまったのだろう。

けれど、不思議とセンリの心は、落ち着いたままだった。

元々センリは、それほどミカリのように待ちわびていたわけでもなかった。

センリは、子が生まれたとして、ケイネルが子育てをしているところを見るのが怖かったのだ。

（子が生まれたら、ぼくはひとりぼっちになってしまう）

父にその気持ちを悟られないように、センリは父の話が終わると、すぐさま部屋をあとにした。

それからさらに幾日か過ぎたある日、久々にミカリが宮へとやってきた。

ミカリは見たこともないくらいに暗く沈んだ顔をして、センリのもとへ来るなり言ってきた。

「ごめんなさい。わたしがセンちゃんにハイの菓子をとってきてって言ったから、赤ん坊、だめだったのね」

（え？）

どうやらミカリは、自分が祭りの供え物を盗んだから、神が罰をあたえて、ケイネルの子を流してしまったと本気で思っているようだった。

センリがいくら否定をしても、ミカリは全然耳にも入らないようで、ずっと下をむいてうつむいていた。
よく見れば、わずかに目も腫れているのがわかった。

センリはそんなミカリを見て、父に言われたことを思いだして言った。
「ケイネル……母上の子が流れたのは、わたしのせいなのだ」
ミカリが、驚いてセンリの顔を見あげた。
「父上が言っていた。母上はぼくのことを気にかけていたから、心配と不安が積み重なってしまっていたって。
それで、まだ忙しくて赤ん坊を抱いている時期ではないから、神さまがまた今度にしようね、って言ったのだって。
だから、母上の子が流れたのはぼくのせいで、ミカリのせいではないよ」

ミカリはそれを聞くと、大きな声で泣きはじめた。
センリは、いつもはミカリが泣くのは耳がつぶれそうになるので大嫌いだったけれど、この日だけは違った。
ミカリが泣いているのを見ていたら、だんだんと胸がきゅんと締めつけられていくような気がした。

（今度は生まれてきてね）
センリは心のなかで、そうつぶやいた。

六　誕生式典

六　誕生式典

空は青く澄み渡り、また暑い一日がはじまった。きょうはいよいよ、待ちにまった皇女イナの誕生式典の日だ。

ミヤたちは、旅館で朝飯を食べて素早く支度を済ませると、前日でかけた王宮のまえの広場へとむかった。

きょうの広場は、昨日よりもさらにたくさんの人でにぎわっていた。

王宮へとつづく坂道のまえはもちろん、広場の至るところに警備の人が立っていて、騒ぐ酔っぱらいを注意したり、不審な者はいないかと目を光らせていた。

「なぁ、あの坂のうえ、行ってみたいと思わないか？」

帝に挨拶をしに、王宮へむかったソジ親子を待っているときのことだった。

退屈そうにしていたノキが、突然、なにかを企んでいるような顔をして言ってきた。

「だめよ。ソジのお父さんに、ここで待っているように言われたでしょう？　それに、ソジと違ってわたしたちは王宮に招かれたわけじゃないのだから、勝手に行ったら警備の人に怒られてしまうもの」

「でも、すぐ戻るって言っていたのに、遅いじゃないか。おれ、いいこと考えたんだよ」

ノキが、広場の外側に広がる林を指さした。

「まず、あの林を通る。それから」

つづいて、ノキは指先で林をなぞっていき、そのまま丘を越えて、王宮を示した。

「ほら、簡単に行ける」

それを聞いたミヤは、苦笑をうかべながら言った。
「運よく林を抜けられたとしても、あのなにも障害のない芝生の丘をのぼるときに、絶対見つかるわ」
しかしノキは、自分の足なら見つかっても逃げ切ることができると思ったようだ。
「ミヤはここで、ちょっと待っていてくれよ」
ノキはそう言うと、真っ先に林のほうへと駆けていってしまった。
「ちょっと、ノキ！」
ミヤはすぐにノキを止めようとしたが、ノキはあっという間に離れていってしまったうえに、ソジの父にここで待っているように言われたので、追いかけて止めにいくことができなかった。
（どうしよう。ノキ、見つかったら大変なことになるかも……）
ミヤは、ノキがだれにも見つからずに無事にもどってくることをその場で祈るしかなかった。

ノキが去ってすこし経ったとき、王宮のある丘のうえから、大きな鐘の音が聞こえてきた。それと同時に人々のざわめきは消え、皆視線を丘のうえのほうへとむけはじめた。
（式がはじまる）
ミヤはとっさにそう思って必死に辺りを見まわしたが、ソジたちやノキのすがたはまだどこにもなかった。
（ノキったら、まさか本当に王宮へ行ったのかしら）
ミヤはノキが去ってから、ずっとノキが通るであろう丘を注意して見ていた。けれどいつまで経っても、人影が林からでてくることはなかった。
（やっぱり林のなかで警備の人につかまっちゃったのかな）
大勢の観衆のなかに一人取り残されてしまったミヤは、ノキが気にかかり、もはや式典どころではなくなっていた。

ノキを止めに行かなかったことに後悔を感じながら丘を見つめて

いたとき、観衆が一斉に大きな声をあげた。
ミヤは驚いて、王宮のある正面の丘のうえを見あげた。遠くて顔はよく見えなかったが、金色の髪をした帝らしき人が大手を振りながら観衆のまえにすがたを現わした。
帝がすがたを現わしたかと思うと、つづいて、小さな赤ん坊を抱いた小柄な黒髪の女人もひとり現れた。皇女イナを抱いた后なのだろう。人々はますます大きな歓声をあげると、帝とその女人を盛大な拍手でむかえた。
ふと、ミヤのうしろに立っていた人が、帝にむかってなにかを叫んだ。
ミヤは背を押されて、だれかが手を貸してくれなければ、危うく人ごみのなかで転げてしまうところだった。
「大丈夫？」
押し合う人ごみの間から、白く細い腕が伸びてきて、ミヤはその手をとった。
顔をあげると、そこにはいつもどこからか突然現れては、すがたを消してしまう、見慣れた顔があった。
「ギン……！　大丈夫。待って、いまそっちに行く」
ミヤは人をかき分けてやっとの思いでギンの隣へ行くと、慌てて言い訳をした。
「きょうは、わたしが迷子になったんじゃないのよ」
「わかってるよ」
ギンはやさしく笑うと、丘のうえに目をやった。
いつに間にか、帝と女人の間には一人の少年が立っていた。
少年は帝と同じように、観衆にむけて手を振りながら、広場を見渡していた。
「皇子だ。あの皇子も、ミヤと一緒で本当のお母さんの顔を知らないんだよ」
不思議と、ギンの落ち着いたいつもの声は、大きな歓声のなかでもはっきりとミヤの耳まで届いてきた。

帝が何年か前に二度目の結婚をしたというのは聞いたことがあったけれど、皇子が自分と同じく母親の顔を知らないというのは知らなかった。
「どうして？　まえのお后さまはどうしたの？」
ミヤはギンに聞こえるように、耳元に顔を近づけて言った。
「まえのお后さまは、皇子を産んだときに亡くなってしまったんだ。自分の命と引き換えに、皇子を産んだんだよ」
「そうなんだ。……いいお母さんだったのね」
ミヤは、手を振るのをやめて、こっちのほうを見ている皇子を見つめた。
「見て、ギン。皇子こっちをむいているわよ」
ミヤは笑ってギンに言った。
けれどギンは何も言わないまま、ただ黙って皇子を見ていた。
（ギンったら、夢中になってる）
ミヤはこっそり笑うと、また丘のうえに視線をもどした。帝が皇子と女人を引き連れて、坂へむかって歩きだしていた。
帝は王宮と広場をつなぐ坂を途中まで下りていくと、そっとその場に立ち止まった。

歓声が一気に止み、さっきまでのにぎわいは嘘だったかのように、辺りはしんと静まり返った。
すると、帝が声を張りあげながら、ゆっくりと話しはじめた。
「シギアの仲間たちよ。皇女の名は、イナという。二度と戦などない平和なシギアを築くため、私についてきてくれないか」
観衆が大きな拍手で応えた。帝のうしろで、皇子と女人も顔を合わせて笑みをうかべている。
帝も笑みをうかべると、両手を大きくあげた。そしてそれに応えるように、観衆は再び沈黙をつくり、帝に注目した。
「これより、シギアは〈拓きの時〉を迎える！」
帝が叫ぶと、静まっていた観衆はにぎわいを取りもどし、皆口々

に帝にむかってなにかを叫びはじめた。これまでにない盛大な拍手と歓声が響き渡り、凄まじい熱気が会場の隅から隅までを包んでいった。
人々は皆、きょうの空のように晴れやかな顔をしている。シギアの帝は、たしかにシギア（この国）の民に愛されているということがミヤにも伝わってきた。

会場の雰囲気にのまれそうになるくらい夢中になっていたら、式典はあっという間に終わってしまった。
最後まで手を振っていた帝が王宮にもどっていくのを見届けると、観衆はぞろぞろと広場から立ち去りはじめた。
「それじゃぁ、ぼくももどるよ。気をつけて帰るんだよ」
ギンはそう言い残すと、一人で歩いて広場をあとにした。
ミヤはなにか声をかけようとしたけれど、うしろから名前を呼ばれる声に気づいてやめた。
振りかえると、ソジとノキが一緒に坂を走って下りてくるのが見えた。
「ノキ！　どうしてソジと一緒にいるの？」
ミヤは驚いて言った。
すると、ソジがノキの頬をつねりながら言った。
「こいつ、王宮に侵入しようとしたんだ」
「侵入？　まさか、ほんとうに王宮まで行けたの？」
ノキがふてくされた顔をして答えた。
「行けるわけないだろう。林のなかでつかまったよ。あいつら、すごく足が速いんだ」
運が良ければ林は抜けられるかもしれない……とは思っていたが、やはりそれも無理だったようだ。
ノキは林に入っていってすぐ、警備の人たちに目をつけられ、丘をのぼろうとしたとたんにつかまってしまったらしい。
しかし、ノキがつかまってしまったのも当然である。もしまんま

と王宮に侵入できるようなら、シギアはとっくに戦で滅んでしまっているところだっただろう。
まだ子どもだったので大目に見てもらえたようだが、ノキは王宮の側の小屋へ連れていかれ、それからはずっと説教を聞かされていたようだ。
そして式典も終わりに近づきようやく解放されたとき、戻ろうとしたところで、遅くなっていたソジとたまたま合流し、一緒に戻ってきたようだ。
「色々な村の長に声をかけられて、遅くなったんだ。悪かった」
ソジはそう言って謝ると、王宮内での話を聞かせてくれた。あそこの村の長はどういう人だったとかそんな話を聞いていると、ソジはとても同い年の少年とは思えなかった。

ソジの父はこれから王宮で開かれる宴に出席するようで、きょうは三人で宿へむかうことになった。
「もう、ノキったら。いつまでも戻ってこないから、心配したのよ」
まるで昨日と正反対だ。ソジはそんな光景を目にして、隣で笑っていた。
けれどノキは、ミヤと違ってあまり反省の色をうかべてはいなかった。
ミヤに軽く謝るなり、
「でもおれ、間近で王宮見られたんだ。感動したよ！」
と興奮したようすで言っていた。

日が暮れはじめ、シギアは静かな夜を迎えようとしていた。
きょうは式典があった特別な日だからか、話声や笑い声、なかには歌声が聞こえてくる家もあり、昨日と比べるととてもにぎやかだった。
（きょうは楽しかったな）
こうしてソジやノキと一緒にいるときはもちろんだったが、ギン

と一緒にいたときは、心がすごく落ち着いた。ギンと一緒にいると、まるで鳴滝川（川）にいるかのような気分になれた。
まさか、一緒に式典にでられるとは思ってもいなかったので、ミヤはきょうのできごとが本当にうれしかった。
（レーネに帰ったら、おじいちゃんとギンと、きょうの話をいっぱいしよう）
ミヤは心を踊らせながら、レーネで待つオウキやギンの顔を思いうかべた。

翌日、ミヤたちは朝早く宿をでた。
蝉が一日のはじまりを告げるように、鳴きはじめていた。
ミヤは、つぎはいつ来られるかわからない王都の風景をきちんと目に焼きつけて置こうと、王宮や民家、鳴滝川が流れてくるというワール山脈など、すべてを馬車のなかから静かに見つめていた。

レーネに着いたのは、夕焼けで空が紅く染まりはじめたころだった。
ミヤの帰りを楽しみに待っていたオウキは、いつもよりすこし豪華な夕飯を用意してミヤを待ってくれていた。宿の料理に比べると遥かに質素だったが、ミヤは夕飯を食べながら、やっぱりオウキのつくる料理が一番だと思った。

翌日、ミヤは畑仕事を終えると、ギンに会うために山へ入り、鳴滝川へとむかった。
けれどギンはまた、王都へ行くまえと同じように、日が暮れるまで待っていても現れなかった。
その夜、ミヤは寝床につくと、オウキに言った。
「おじいちゃん、鳴滝川にはナリノカミがいるってほんと？」
オウキが驚いてミヤのほうを振りかえった。
「ミヤ、ナリノカミに会ったのか」

ミヤも驚いて、オウキのほうを振りかえった。
「会ってないよ。ねぇおじいちゃん、ナリノカミってなんなの？人を喰らうって本当？」
ミヤが問い詰めると、オウキはすこし沈黙を置いたが、静かに話しはじめた。
「ずっと、黙っていたのだが……。ミヤ、おまえのお母さんは、ナリノカミに喰われたんだ」
一瞬、ミヤの背が凍りついた。
「……どういうこと？　ナリノカミは、小正月のお祭りでしょう？お祭りがどうしてお母さんを喰らったの？」
「ミヤ、それは違う。ナリノカミは――鳴滝川の神さまだ」
（鳴滝川の神さま……？）
ミヤは、毎年小正月にあるお祭りが、鳴滝川に感謝するために行われることを思いだした。
「どうして鳴滝川の神さまは、わたしのお母さんを喰らってしまったの？」
ミヤは目に涙をうかべながら、オウキに問いかけた。
オウキは灯りのついていない暗い部屋のなかで、ミヤの涙に気づくことなく答えた。
「……あれは、ミヤを連れ帰ったあとのことだった――」
オウキはそう言うと、ミヤが五才のときに語ってくれた話の、その後のできごとのことを話しはじめた。

九年ほど前、ミヤを連れ帰ったオウキは、当時のレーネ村の村長――ソジの祖父のもとを訪れ、村人を集めてはミヤの親をさがしたそうだ。けれど、だれもミヤのことを知っている者はいなかった。
そこでもしかしたら、ミヤの親は山で事故にでもあったのかもしれないと、村人はミヤが置き去りにされていたあぜ道の付近の山へ入っていき、幾日も総出でミヤの親をさがしまわった。
そしてある日、鳴滝川の川沿いをさがしていた村人が、村長のも

とへ駆けよってきた。その村人は、まだ若い娘を見つけたと言って、オウキと村長を鳴滝川の滝壺へと導いていった。
滝壺について見てみると、そこにはたしかに村人の言った通り、まだ若い娘が澄んだ泉の底に沈んでいたという。
そしてそれからというものの、村人の間ではナリノカミが人を喰らうという噂が広まり、だれも鳴滝川へは近寄らなくなったそうだ。

「娘の顔はミヤにそっくりだった。ミヤだけ不自然にあぜ道に残されていたのも、もしかしたらナリノカミの仕業なのかもしれないな……」
オウキはそう言うと黙り込み、やがて小さな寝息をたてはじめた。

（おじいちゃんは、お母さんを見たことがあったんだ……。お母さんはやっぱりもう生きていなかった……）
ミヤはすっと、心に絡まっていた糸がとれたような気がして、深く息をした。

翌日、翌々日も、ミヤは鳴滝川へ行った。
けれどそれでも、ギンが現れることはなかった。
ミヤは鳴滝川の川沿いで、オウキの言っていたことを思いだし、滝壺のあるほうを見つめた。
（お母さんが最後に行った場所……）
ミヤはもう一度滝壺へ行こうか迷ったが、やめた。滝壺は狩人がいて、銃声が聞こえてくる。あのような心が凍りついてしまうような音を、もう二度と聞きたくはなかった。

オウキはいつのころからか、ミヤが山へ入っていくときは鳴滝川へ行っているということに、勘づいてしまった。
「母親に呼ばれているのでないならいいが……」
と、つぶやくこともしばしばあった。

（あした。あしたで、最後にしよう）
いつまでもオウキに心配をかけるわけにはいかない。
何日行ってもギンが現れなかったある日、ミヤは決心した。
（もしかしたら、もう二度と会えなくなるかもしれないけれど）
山々の青い葉は、すこしずつ黄色く彩どりはじめていた。

やがて夏が去り、山々がすっかり赤や黄に装いを替えたころ、のどかで平凡な農村・レーネに、王宮から一通の文が届いた。いつもとは訳の違う内容のその文の噂は、あっという間に、小さな村に浸透していった。
ミヤはその文が届いたことを、息を切らしながらやってきたソジから聞いた。
「ミヤ、帝がおまえをお呼びだ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8632y/

鳴ノ海の物語

2011年12月29日20時53分発行